

2024年10月13日聖霊降臨後第21主日説教

アモス書5章6-7、10-15節
ヘブル人への手紙3章1-6節
マルコによる福音書10章17-27節

聖餐式聖書日課B年は、マルコ福音書を連続して学んでいますが、いくつかのお話が省略されています。先週は、「離縁について教える」箇所(10:2-9)から学びました。その後に「子どもを祝福する」お話(10:13-16)がありますが、省略されています。そこには「よく言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない」(10:15)と、キリスト教教育の世界では有名なイエス様の言葉があります。本日のお話は、その内容を受けて展開しています。

新共同訳以降、新しい聖書協会共同訳にも『聖書』には小見出しがあります。ここは「金持ちの男」です。これは現代的な言い方をすれば、ネタバレです。なぜならば、彼は、「ある人」として突然登場し、失意のうちに立ち去った後、最後に金持ちであることが判明するからです。ただし、そこに衝撃を受けるのは最初に読んだ時だけですから、「金持ちの男」という小見出しも仕方がないかもしれません。

お話は、イエス様がエルサレムに向かう旅に出ようとしている時、ある男がイエス様に走り寄って、跪いて尋ねることから始まります。この「ある男」(直訳すれば「一人の男」という表現は重要)です。登場人物は、会堂長ヤイロのように名前が告げられる人もいますが、多くの方は告げられません。この「ある男」は、そのような文字通り名もない登場人物として現れたのです。ただし、「走りより、ひざまずいて尋ねた」という登場の仕方は、会堂長ヤイロを想起させます。

彼は、イエス様を「善い先生」と呼び、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねます。イエス様は、まず彼の「善い先生」という呼び掛けに対して、「なぜ私を『善い』と言うのか。神おひとりのほかに善い者は誰もいない」と答えます。このイエス様の答えは、最初に触れるのはそこですか?という感じですが、しかし、主なる神様が善悪の基準であることが、信仰においても理性的判断においても基本であると告げたのです。イエス様は、その基本を示した後、『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父と母を敬え』という戒めをあなたは知っているはずだとモーセの十戒に記されている基本的な事柄を語ります。律法は法律ですが、普通の法律は異なり、常に、全ての善の源である主なる神様のご意思は何か、そのことを考えて守ることが大切なのです。

彼は、「先生、そういうことはみな、少年の頃から守ってきました」と断言しています。この部分の訳「少年の頃から」は、新共同訳「子供の時から」、口語訳「小さい時から」から変わり、より原語の意味に近い訳になりました。少なくとも、すぐ前のお話の「子ども」という意味ではないからです。彼のこの自信に満ちた答え方は、過去も現在も、そしておそらくはこれからも信仰深くまた真摯な人間であることを示しています。すなわち、律法を守ることを通して、主なる神様を愛すること全うしていたことを示します。しかし、そこに大きな問題点が存在したのです。

そのような彼に対してイエス様は、見つめ、慈しんで言われます。「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に与えなさい。そうすれば、天に宝を積むことになる。それから、私に従いなさい」。ここにある「慈

しんで」という言葉は、「愛して」と訳すこともできます。イエス様は、彼を愛して、最も大切なことを教え、そして従うことを求めたのです。しかし、イエス様の言葉は、彼に大きな衝撃と悲しみとを与えます。それゆえ「**彼はこの言葉に顔を曇らせ、悩みつつ立ち去った**」のでした。なぜならば、「**たくさんの財産を持っていたから**」でした。ここで初めて彼が裕福であったことが告げられます。「財産」は口語訳では「資産」でした。

彼がどれだけ豊かであったか、「**たくさんの財産**」という表現だけではわかりません。しかし、イエス様の時代、イスラエルであっても、貧富の差がかなり激しかったと推定されます。一般的に金持ちと呼ばれる人は、人口全体の1から2パーセントと言われています。彼はそこに含まれます。中流階級という層はありませんので、その他は貧しい人です。彼は自分の社会的立場を考慮することなく、律法を守っているから、主なる神様をしっかりと愛していると思っていたのです。

このお話から、貧富の差の解消ための努力、あるいは、今富を持つ人への警告などが引き出される場合があります。わたしたちの国は、現段階ではまだ富の分配がある程度なされているといえますが（それでもかなり格差が生まれつつありますが）、現代でも上位10パーセントの人々が、その国の七割近い富を持っている国もあります。世界的に見ると、貧富の格差は深刻な問題であり、様々な社会問題の原因の一つといえます。しかし、その根本を暴力的・革命的に解決すべきかということ、それはすくなくともイエス様の教えではありません。イエス様は、このお話の名前もないが金持ちの彼を「**見つめて**」、「**愛して**」教えを語ったからです。

「ある男」は、登場人物としては失敗例です。また彼の後日談はありません。それは読者の想像に任されています。ただし、読者は、イエス様の「**行って持っている物売り払い、貧しい人々に与えなさい**」という言葉が、単に富を捨てることではなく、すぐ前のお話にあった「**子どものように神の国を受け入れる**」ことと結びつく時、彼に変化が起きるかもしれないと想像することができます。「**子どものように神の国を受け入れる**」とは、誰かが存在しなければ生きることができない子ども、そのような人として生きることであるからです。彼は、膨大な人の幸福や喜びによって（それらを奪ってきて）金持ちとして存在してきました。イエス様の教え通りに急にすべてを捨てることはできないかもしれませんが、今まで主なる神様を熱心に愛してきたことと同じように、隣人を愛する歩みを始めることはできるでしょう。そしてその時、何かが起こるからかもしれないからです。イエス様の最も大切な教えの一つは、主なる神様を愛することと、隣人を愛することは、二つではなく一つとらえることであるからです。

そもそも主なる神様の意思を常に考えながら、真摯に律法を守るとき、貧富の差は可能な限りなくなるはずです。また本日のアモス書が示す通り、預言者たちも貧しい人を虐げる富める人々を厳しく批判して来たのです。もちろん、今も貧富の差がある通り、世界はなかなか主なる神様の御心の通りになりません。また、そのようなことが可能なのかという疑問ができます。だからこそ、イエス様は弟子たちを「**見つめて**」、「**人にはできないが、神にはできる。神には何でもできるからだ**」(10:27)と語られたのです。主なる神様とともに歩む時、人間にはできないと思うことも可能になるのです。今日のわたしたちも、イエス様に「**見つめられ**」「**愛されてる**」ものとして、主なる神様を愛することと隣人を愛すること、それらが一つであること、それを具体化する歩み、そのためお努力を続けたいと思います。